

公益財団法人 日韓文化交流基金 NEWS

<https://www.jkcf.or.jp>



2021.2.26 No. 95

CONTENTS

- 1-3 日韓文化交流基金オンライン講演会**
Aspects of Korean Culture and Society 開催
- 4-5 日韓教員オンライン交流**
—教育関係者を対象とした新たな交流の広がりに—
- 6-7 フェロー研究紹介**
「自由で新しい」報道とは 韓国メディア研究
産経新聞外信部 時吉 達也
- 8-9 助成事業紹介**
「コロナ」に負けるな —各団体の取り組み—
- 10 会議事業**
第20回日韓歴史家会議「越境をめぐる歴史」
- 11 交流エッセイ**
オンライン 第3回日韓大学生OB・OG交流会
- 12 青少年交流事業**
日韓大学生オンライン交流事業を開催

事業報告
青少年交流事業
学術定期刊行物助成

講演会

日韓文化交流基金オンライン講演会 Aspects of Korean Culture and Society 開催

日韓文化交流基金では2006年より、韓国・朝鮮研究の専門家を講師に招き、それぞれの専門の分野や日韓関係を主題とした、一般の方々向けの講演会を開催してまいりました。

今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、これまでの対面式での講演会の実施が難しくなったことから、オンラインによる講演会を2020年11月20日より2021年2月19日まで4回にわたり、映画、歴史、ドラマ、K-POPと幅広いテーマを取り上げて開催しました。

講演に際してはオンラインセミナーアプリを活用することにより、コロナ禍にも拘らず全国から700名を超す多様な世代の参加者の事前登録を得て実施することができました。

当基金では、今回のオンライン講演会での経験をもとに、日韓両国の文化により関心を持っていただけるプログラムを引き続き提供して行きたいと考えております。

今号では、11月20日開催の第1回「映画『パラサイト』と韓国社会のリアル」（講師：河昇彬 韓国外国語大学校日本研究所研究委員）、12月18日開催の第2回「帝国日本のスポーツと朝鮮人アスリート」（講師：金誠 札幌大学地域共創学群教授）の講演について紹介します。

日韓文化交流基金「オンライン講演会」 Aspects of Korean Culture and Society 開催 (4回シリーズ：無料、毎月第3金曜日 午後8時～9時半開催)

Aspects of Korean Culture and Society		講師
第1回 11月20日(金)	#1 Movie 「映画『パラサイト』と韓国社会のリアル」	河昇彬 (政治学者)
第2回 12月18日(金)	#2 History 「帝国日本のスポーツと朝鮮人アスリート」	金誠 (歴史学者)
第3回 1月15日(金)	#3 Drama 「時代を彩る韓国ドラマの変遷—『冬のソナタ』から『愛の不時着』まで」	高橋尚子 (ライター・編集者)
第4回 2月19日(金)	#4 K-pop 「BTSについての一考察 なぜ世界を夢中にさせるのか」	桑畑優香 (ライター・翻訳家)



4回シリーズとして開催したオンライン講演会



第1回講演要旨

「映画『パラサイト』と韓国社会のリアル」

韓国外国語大学校日本研究所研究委員
講師:河昇彬 さん(ハ・スンビン)

1. 『パラサイト』の受賞と韓国社会

アカデミー作品賞のプレゼンターを務めた女優ジェーン・フォンダの口から『パラサイト』の名が出た瞬間、韓国は歓喜に包まれた。2020年は韓国映画100周年を迎える記念の年だったのだが、それを記念するかのようにアカデミー初の外国映画として見事に作品賞を受賞した。それも、作品賞だけではなく、監督賞・脚本賞・国際長編映画賞までの四部門で受賞した。作品性を重視するカンヌと興行を重視するアカデミーの両方の受賞は、世界的にも注目を浴びつつある韓国映画の新たな可能性を示したとも言える。

では、この映画にはどんな魅力があるのだろうか。それを理解するためには、監督であるポン・ジュノの世界観を理解する必要がある。ポン・ジュノはデビュー作である『吠える犬は噛まない』から、『殺人の追憶』『グエムルー 漢江の怪物』『母なる証明』『スノーピアサー』、そして『オクジャ』に至るまで、韓国社会にまたがるさまざまな問題に対峙する個人や家族を描いた作品を撮り続けている。中でもポン監督が注目している社会問題の核心は「格差」であり、ほとんどの映画で格差が定着している社会に焦点を当てている。

2. 映画が描く「家族」の群像

この映画の中では3組の家族が登場し、いろいろな撮影技法や視点で彼らの中での格差を表している。

まずは、ソン・ガンホ扮するギテク一家。住んでいるのも半地下で、収入も一定でなく、ギテクの職業も何度も変わっている。ただ、最初からそんな状況ではなかった様子も描かれていて、段々と下流生活に追い込まれていった様子が伺える。

もう一方は、明らかな上流社会であるパク社長一家。家も高級住宅で、高級車を2台も乗りこなし、生活にも仕事にも余裕を感じられる。使用人に対してもおおらかで彼自身が定めた「線」さえ越えなければほとんどのことは大目に見てくれるほどの良い人であった。

最後は、パク社長の家の使用人であるムングァンの家族である。彼女の場合、見た目は上流社会に溶け込んでいるように見える。しかし、彼女の実態は…というのは映画を見てない人のためにも割愛しておこう。ポン監督本人が「まるでジェットコースターに乗ったような感覚」と言った映画のクライマックスまでの緊張感はこちらから始まるので、まだ映画を見てない方は是非とも見てほしい。

3. 「チャバグリ」で象徴される衝突

ここに登場する家族は、普段であれば交わることはなく、互いに張られた「線」の中で生きていくはずだった。しかし、いつの間にかその線を越える人が現れる。時には階段を通じてその上下の線を越えていき、また、影からひなたに出ることでその生活の線を越えてしまう。最後には意図しなかった「匂い」までもがその線を越えていってしまう。

そして中盤以降では、この映画で話題となった「韓牛入りチャバグリ」のように3つの家族が家という空間の中で混ざっ

てしまう。この映画でチャバグリは高級食材＝パク社長一家、種類の違う2つの袋麺はギテク一家とムングァン一家を象徴していて、中盤以降からこの家族たちが交わって大変なことになることを暗示している。

映画は下流社会にいる人々が上流社会に寄生していき、時には彼らを恨み、妬み、一方では感謝とリスペクトをしながら下流社会同士の争いを描く。この姿はポン監督が見る韓国社会であり、世界でも共感を得た格差問題の現状であった。

4. 韓国社会のリアル

実際の韓国では1997年に通貨危機が起き、経済状況が急激に変わった。この時に職失った人々はギテクのように家族を養うためにいろいろな職を転々とし始める。そして、失敗を重ねて半地下や屋根上部屋などに流れて行くようになったのである。

この半地下や屋根上部屋は社会経験の浅い若者や大学生たちの住処だったのだが、いつの間にか下流社会の人々が集まり住む空間となる。韓国戦争時代から都市には人々が集まり住み始めた「月の町(달동네=タルトネ)」と呼ばれた地域があったが、その地域の再開発が始まると住んでいた人々も半地下や屋根上部屋に移り住んだ。しかし、今度はその地域でも再開発が始まってしまう。行き場をなくした下流社会では、そこから追い出されまいと、生き残りをかけて下流社会同士が衝突している。上下階級の衝突ではなく、階層内での衝突が起きているのである。

5. おわりに

この現象は韓国だけの問題ではない。格差問題を抱える国々で同じような現象は起きている。この映画が世界的に注目されヒットしたのも、この「格差」という問題に対し世界各国が共感したからであると思われる。映画は面白くその世界を描き出したが、現実はより「リアル」なものであることも訴えているのかも知れない。



再開発が始まった現場(2枚とも著者撮影)



PROFILE

河昇彬(ハ・スンビン)

政治学者。韓国・釜山出身。神戸大学大学院法学研究科で博士号を取得。専門分野は電子政府化や日韓比較など。現在は韓国外国語大学校日本研究所研究委員、日韓同時通訳士を務める。



第2回講演要旨

「帝国日本のスポーツと朝鮮人アスリート」

札幌大学地域共創学群教授

講師: 金 誠 さん(きん まこと/キム・ソン)

1. はじめに

オリンピック憲章の根本原則の第2原則には、次のように記されている。

オリピズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てることである(オリンピック憲章2020)

オリピズムの目的は素晴らしい。しかし、その実は一体どうなのか。人々をスポーツへと掻き立てる熱狂は、この原則と相容れうるものなのか。国際社会の協調を象徴するオリンピックという巨大なシステムは、このオリピズムの理念が繰り返し世界に発信されることで人々のスポーツに対する認識やイメージに影響を与える。アスリートたちはこのオリピズムを体現する者であり、オリピズムの表象ともなる。

オリンピックに代表されるこうしたスポーツのイメージは、かつて帝国日本の時代を生きた朝鮮人アスリートたちをその志向性へと誘いながら、何かを「代表」するものとして導いていく力を持っていた。



ベルリン五輪での孫基禎のゴールシーン
「アサヒスポーツ」1936年9月号

2. 「帝国」日本とスポーツ

近代日本は植民地を領有する帝国であった。この帝国日本における内地と外地(植民地)に近代文化としてのスポーツが近代的な生活様式とともに流入し、近代教育制度が整備され、スポーツ組織の結成により、普遍主義的なスポーツの価値観も広まっていくことになる。英国で誕生した近代スポーツの広がり、各地域における近代化の指標でもあった。

日本が朝鮮半島を植民地とした時代、朝鮮のスポーツはそれぞれのアクターの思惑とともに推移することとなる。文化政治期には、朝鮮総督府を中心とする植民地権力側はスポーツを日本人と朝鮮人の民族「融和」を図るための象徴にしようとしていたし、一方で、朝鮮民族のなかでも近代化志向を持つ朝鮮知識人らはスポーツの発展やスポーツでの勝利を「民族の優秀性」に結びつけていた。植民地朝鮮のスポーツはそうした互いの思惑が反映される場だったのである。

3. 「英雄」とプロパガンダ

朝鮮における植民地権力と民族主義の相反するスポーツへの思惑の投影は、1936年のベルリン五輪のマラソンで優勝した孫基禎の報道を巡って、双方が対峙する事件へと発展した。日章旗抹消事件がそれである。当時の総督府警務局長は東亜日報社の行為が民族の「融和」にもとる行為であるとして、無期

限停刊の処分を下す。英雄孫基禎は帝国日本のなかで警戒される存在となり、やがて帝国日本に包含されていく。

帝国日本がアジア太平洋戦争へと向かっていった総力戦体制下の朝鮮社会では、陸軍特別志願兵として最初に戦死した李仁錫という人物が「死した英雄」として朝鮮人の兵器的動員を正当化するための象徴として扱われ、金メダリストの孫基禎は「生きる英雄」として学徒志願兵を募る存在となる。朝鮮の英雄たちは朝鮮人の戦時動員を志向する植民地権力に利用されることになったのであった。

4. 朝鮮人アスリートの群像

植民地朝鮮には孫基禎以外にもスポーツの英雄として活躍したアスリートが数多くいる。もちろんオリンピックとなった選手たちもそうだが、例えば朴錫胤のように日本の第三高等学校で野球を行い、投手として大活躍し、朝鮮に戻ってから徽文高等普通学校を甲子園へと導いた者もいる。彼は対日協力者として植民地期を生き、解放後に北朝鮮で処刑されてしまう。また、徐廷権はバンタム級6位という帝国日本のなかで初めて世界ランカーになったボクサーであり、孫基禎がベルリン五輪で優勝する前に、朝鮮民族の英雄として脚光を浴びた人物であった。

陸上競技の跳躍種目には金源権がいた。彼は1939年にウィーンで開催されたユニバーシアードに出場し、三段跳びで優勝。1940年の東京五輪が返上されずに開催されていたら絶好のコンディションでオリンピックに臨んでいただろう。

彼らは比較的裕福な家庭に育ち、近代スポーツを享受し得たのであり、近代主義的価値観を有した選手たちであった。



徐廷権のボクサー姿

5. おわりに

帝国日本のなかの朝鮮人アスリートたちは、帝国日本・朝鮮民族の双方を背負うことにもなる運命であった。スポーツという領域に身を置く限り、彼らはその場から逃れるすべはなかった。ゆえに、彼らに着目していくとスポーツという文化を通して当該期の帝国日本の政治性を分析することにもつながるのである。

PROFILE

金 誠(きん まこと/キム・ソン)

札幌大学地域共創学群教授。専攻はスポーツ史・朝鮮近代史。神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程単位取得退学。博士(学術)

著書に『孫基禎—帝国日本の朝鮮人メダリスト』(中公新書、2020)などがある。

日韓教員オンライン交流

— 教育関係者を対象とした新たな交流の広がり —

現在、新型コロナウイルス感染拡大により、両国の教育現場も大きく影響を受けています。今こそ、両国の教育現場の課題を分かち合い、交流することができないかと考え、これまで教員交流事業を当基金と共に担ってきた韓国国立国際教育院と共同で、直近3ヶ年度の参加者を対象としたオンラインでの交流を実施しました。

日韓の教育関係者（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校所属の教員）を対象とした相互交流は1989年にスタートし、現在までに4000名を超える参加者が交流を積み重ねてきました。互いの国の教育現場訪問、教員同士での両国で共通する教育課題についての意見交換、生徒たちとの交流等を通し、相互理解を深めてきました。本事業をきっかけに、生徒同士の交流や姉妹校締結に発展するという成果も生み出してきました。

今回の交流では日韓の教員間でさらに交流を発展させていきたいとの意見も多く出ました。当基金としても日韓の教員交流の発展につながるような場を今後も継続的に提供できるよう取り組んでまいります。

● 交流概要

全4回 参加者：延べ67名

(日本教員：28名、韓国教員：39名)

	日程内容
①9/9	自己紹介(訪日団/訪韓団で印象に残った経験の発表) 発表(①訪韓団一行受入体験、②日本の学校における防災教育)、質疑応答
②9/23	発表(①学級運営及びプロジェクト授業、②小学校6年生のオンライン英語授業の事例)、質疑応答
③10/14	発表(文化芸術教育を通じた交流活動) 自由討論：テーマ「望ましい日韓関係のための教員の役割」
④10/28	特別講義：テーマ「今ここでの韓国文化との疎通」 講師：淑明女子大学 キム・セジュン教授

参加者の感想紹介

1. 氏名、現在の勤務校、訪日団/訪韓団参加年度
2. 訪日団/訪韓団に参加した際、印象に残ったこと。
3. 今回の日韓教員オンライン交流に参加した感想。印象に残ったこと。
4. 教員として今後具体的にどのような日韓交流を行いたいのか。

1. 朴贊修(パク・チャンス) 先生

原州雉岳初等学校/2018年度

2. 訪問した日本の学校が地域と連携し、地域の芸能を継承する取り組みを行っている点が印象深かったです。調布市立深大寺小学校では、地域の伝統舞踊「みかぐら(御神楽)」が児童たちの間で継承され、長野県飯田市の小・中学校では、学生たちが人形浄瑠璃を習い「いいだ人形劇フェスタ」に参加していました。日本の伝統文化教育では、多様な文化を断片的に学習するのではなく、時間をかけて深く学びながら地域の文化を守りつなぎ、生徒たちが主体となって成長していけるよう、学校と地域社会とが連携している点が印象深かったです。
3. 訪日団の際にも日本の先生方と対話する時間が設けられていましたが、深い話まではできなかったことがとても残念でした。新型コロナウイルスの影響で始まった今回の交流ではありましたが、日本の先生方とテーマに沿った意見交換を行い、率直な意見を分かち合うことができ大変良かったです。今後、両国の教員が訪問交流を行う際には、あらかじめオンライン交流を実施することで、さらに効果的な交流が実現できるのではないかと思います。

4. 私はユネスコ、APECネットワークを通し、学校で生徒たちとミュージカルを活用した海外の学校との交流活動を行っています。今までにフランス・インド・中国・タイ・フィリピンとの交流を行いました。文化芸術をテーマに学生たちが交流を行った際には、大きな教育効果と継続の可能性を実感することができました。韓国と日本の生徒たちの間でも文化芸術をテーマとした交流活動をぜひ実現したいです。韓国の学校現場では、演劇とミュージカル教育が校内暴力防止教育として位置づけられています。今回のオンライン交流を通して、日本でも演劇を教育に活用したいという試みがあることを知りました。韓国と日本の教員たちが共に両国のミュージカルを活用した教育コンテンツを作ってみることを提案したいと思います。



訪日団で印象に残った日本の伝統芸能教育(写真右:朴贊修先生)



今回紹介された文化芸術教育を通じた交流活動

1. 沈賢暎(シム・ヒョニョン) 先生

ソウル孔硯初等学校/2018年度

2. 調布市立深大寺小学校の生徒たちが地域伝統の「みかぐら(御神楽)」を実演してくれましたが、大変完成度が高い公演で、生徒たちの真剣な表情に感動しました。伝統文化を学ぶことへの生徒たちの認識について日本の先生方に質問しましたが、その学校では全生徒が卒業前に学ぶことを当然の義務だと考え、学ぶことへの疑問はないとのことでした。韓国の生徒たちも伝統文化を誇りに思っていますが、最近の音楽やダンスを好み、伝統の踊りや楽器を習うことは退屈だと考える傾向があります。日本の生徒たちが地域の伝統文化を大切に、継承しようとする姿がとても印象深かったです。
3. コロナウイルス感染拡大による学校現場の現状及び課題について共有し、日本の先生方と同じ教師同士苦勞を分かち合うことができよかったです。他の国の先生方とオンラインで交流する経験を通し、生徒たちの言語教育、グローバルシティズンシップ(世界市民教育)等でも活用す

ることができるアイデアを得ることができました。参加後、筒井小学校の岩井里奈先生とメールのやりとりを行い、お互いの学校や地域についての資料を交換し合い、授業時間に岩井先生が送ってくださった奈良県に関する資料を生徒たちに紹介したところ、生徒たちが大変興味をもってくれました。また、ソウルについて紹介した映像を日本の先生方に見せて喜ばれたことを伝えると、生徒たちも大変喜んでくれました。

4. 1年に1回程度、今回のようなオンライン交流を行うことができると良いと思いました。今回の交流をきっかけに、教員同士の1対1の個人交流も継続できるのではないかと思います。



今回のオンライン交流では、英語のオンライン授業実践の様子を詳しく紹介しました。

1. 岩井 里奈 先生

奈良県大和郡山市立筒井小学校/2019年度

2. 私が一番印象に残ったことはサヌイ初等学校のカン先生と話したことです。「先生をしていて大変なことは何ですか?」と質問すると「放課後、子供同士の喧嘩について、保護者から連絡があったとき」と言っておられました。それを聞いて私は何だか笑ってしまいました。国が違って、同じことで悩む先生がいるのだと思うと、韓国の先生をとて身近に感じたからです。カン先生に共感するとともに、自分が苦手なことが小さく思えた瞬間でした。
3. 訪韓団の際は、主に学校見学だったので、韓国の先生の授業実践を聞ける機会はとても貴重でした。オンライン交流で一番印象的だったのは、シム・ヒョニョン先生のオンライン授業についての実践発表です。これから私の学校でもオンライン授業を進めていかないといけないので、とても参考になりました。また、オンライン交流では回を重ねるごとに、

教員同士の意見のやりとりが活発になりました。実践発表を聞いて率直に思ったことを話し合えたのが良かったです。

4. 私は、訪韓・訪日の経験を生かした授業実践の交流をしたいです。その理由は、お互いの国を訪れて終わりにするのではなく、その後その経験をどのように授業に生かしたかについて意見交換することで、お互いの授業力が高まったり、それぞれの国の教育についての理解が深まったりするからです。私は訪韓後、韓国の小学校や文化についての授業を行いました。その授業を韓国の先生に見てもらって、どのように感じたか感想を聞いてみたいです。



訪韓団での韓服試着体験



訪韓団での活動を紹介する授業を実施

1. 小田切 俊幸 先生

長崎県立諫早高等学校/2017年度

2. 意外とテレビ報道されているような反日感情は強くないということ、研修の中でも言われていた「似ているがゆえに少しの違いが目につく」ということを実感しました。
3. 国は違えど、新型コロナウイルス対策としての休校措置など共通する課題が多く、ITを積極的に用いられて、課題の配信や回収などを手際よく行っている韓国の先生方の様子を知ることができて、参考にできることが多かったです。
4. このオンライン交流会で知り合ってFacebookで交流を始めた韓国の先生と連絡を取り合い、少子高齢化やいじ

めなど共通する課題を一緒に考え、授業改善につなげていきたいです。また、この交流をしている先生は、演劇的手法を取り入れた教育に熱心に取り組まれているので、この先生との交流を深めて、自分の教育活動にも取り入れていきたいと思います。



訪韓時のホームステイ先にて(写真右:小田切先生)



ジャムヒョン初等学校にて「ポケモンカード持っているよ」と近づいてきてくれた小学生

「自由で新しい」報道とは 韓国メディア研究

産経新聞外信部 時吉 達也

2019年度訪韓フェローシップ「オピニオンリーダー育成コース」の対象者として1カ月間韓国にて滞在研究をされた時吉達也氏のレポートを紹介します。

韓国情報を収集する際の参考にしていた「メディア報道」そのものに強く関心を持ち始めたのは、現地取材を担当した18年の平昌冬季五輪の時だったように思う。取材陣が寝泊まりする「メディア村」の周辺で紙の新聞が一切見当たらないことに、まず驚いた。

周辺のコンビニなどを回っても「売るのをやめてもう3年はたつ」「販売店を周囲で1軒も見ることがない」などの言葉が返ってくるばかり。結局1キロ以上離れたバスターミナルの売店で新聞を発見したが、店のおばちゃんに「うちも五輪が終わったら新聞を置くのはやめようと思ってたの。誰も買ってくれないからね」と苦笑いされたのが、印象的だった。

関心を引かれるトピックは、「新聞離れ」の問題にとどまらなかった。李明博・朴槿恵政権下での言論弾圧の実態が生々しく描かれたドキュメンタリー映画『共犯者たち』が日本でも公開される一方、ネットニュースのコメント欄が改ざんされ大規模な世論誘導を図った事件に、文在寅大統領に近い有力政治家が関与していた事実も明らかになった。反面、各国の「報道の自由」ランキングでは韓国が日本を大きく上回る状況が何年も続いている。

韓国が報道の「脱アナログ」にどう対応しているのか、「報道の自由」に関し日本との違いはどこにあるのか。日韓文化交流基金に機会をいただいで1カ月間ソウルに滞在し、テレビや新聞、ソーシャルメディアなどで報道に従事する多数のメディア関係者から話を伺ってきた。



社会性のある動画コンテンツを制作し、YouTubeなどで配信する新事業担当者の勉強会

◆「報道の自由」を守る難しさ

韓国で「報道の自由」が侵害される事件が発覚するたび、外部からの圧力に関する生々しい録音証拠などが公になることに、しばしば驚かされてきた。

もちろん、日本メディアでも、NHK会長人事に関する政治介

入疑惑や、広告主との関係をめぐる新聞の問題点が報じられることはある。別の機会に触れたいが、記者クラブの排他性など、報道の自由に関する日本特有の問題も抱えている。それでも、公営放送に対する政府の人事権行使の仕組みや新聞収入に占める広告費の高比率などを踏まえると、韓国は日本に比べ、テレビが政治から、新聞が企業から、それぞれ直接的な圧力を受けやすい構造になっているといえるだろう。

そんな環境下でも、報道介入事件が発覚した際には内部の証拠記録が詳細に公表され、現場の記者らが会社幹部・上司の不正について公然と非難の声を上げる。個人的には、日本メディアにはない、ある種の「高潔さ」を感じていた。

しかし、メディア関係者に直接話を伺うと、話はそれほど単純でもないようだった。

ある保守系大手紙の中堅記者は「うちでは企業の圧力に屈するような事案が起きても、内部で抗議の声を上げにくい」と打ち明ける。社員や一般の国民を株主として経営している京郷新聞やハンギョレ新聞などでは記者の投票で編集幹部が決められるのに対し、オーナー企業である大手3紙などは人事面での不利益を受ける懸念から、記者が声を上げにくいというのだ。

さらに、公営放送MBCの関係者は「民主的な社風を持つ報道機関は、深刻な社内分裂に苦しんでいる」と別の問題を指摘する。近年の保守政権下で、日本のNHKにあたる放送局KBSとともに言論弾圧にさらされた同社では、抗議活動に伴い記者ら200人以上が解雇されたり閑職に追いやられたりしたが、2017年の政権交代に伴い一斉に復職した。すると、数年間業務から離れていたことや、電子機器の進化に対応できないことで、記者の「素人がえり」の問題が顕在化したという。

記者が安定した環境で経験を積める企業では外部介入による不適切報道への監視が不十分となる一方、労働組合などを通じ記者が発言力を持つ企業では幹部の一斉交代が起こりやすく、組織の不安定さが報道機関としての弱体化をもたらす。話を聞くほど、メディアが外部圧力をはねつけ、「報道の自由」を守ることの難しさを実感した。

◆「脱アナログ」対応の副作用

英オックスフォード大ロイター・ジャーナリズム研究所調査で、新聞など紙媒体のニュースに対する日本国内での信頼度



政治系YouTuberの成済俊（ソン・ジェジュン）さん。既存の放送局が「視聴者を無視し、独りよがりの報道を続けている」と批判する

は、2013年の67%から、20年は27%まで急落した。そんな日本より遥かに早く「紙離れ」が進み、信頼度が18%で低下している韓国で、ニュースのデジタル化が先行しているのは間違いない。今回、デジタル化がもたらした「副作用」についても数人の記者から話を聞いた。

韓国は、インターネットを使った情報検索

の入り口となる「ポータルサイト」発のニュース配信が世界で最も普及した国であることが、同じ調査でも裏付けられている。記事の閲覧者数などに応じて収益を分配するポータルの普及は、報道媒体を劇的に変えた。自前のニュースサイトの構築さえ必要とされない環境下で、少数経営のネット専門メディアが急増し、韓国で法律上の登録を済ませたのは08年に1000社を突破、18年には8000社を超えた。

テレビ番組での芸能人の発言をそのまま紹介したり、対象者への取材を一切行わないまま既存の記事を剽窃（ひょうせつ）し、出所不明の関係者の声や過激な論評を追加して配信する。いわゆる「コタツ記事」は日本でもしばしば問題になるが、日本以上にネットメディアの存在感が広がる韓国では、さらに問題が深刻化している。今回話を聞いたある若手の大手紙記者はスマートフォンで大手ポータルサイトの画面を示しながら、「政治や芸能とは関係がないはずの業界紙を名乗るネットメディアが、ゴシップ記事を競って出稿する。変わった切り口の見出しが注目されてポータルのトップニュースとして紹介されることもある」と指摘した。こうした状況と比較すれば、日本の既存メディアは大きく信頼を失いつつあるとはいえ、インターネット上に場を移しても比較的存在感を示しているといえる。ポータルサイトではなく新聞社などのホームページを訪問してニュースに触れる読者が比較的多いことも特徴的だ。

一方、取材を進めるなかでは「韓国に比べて衰退が緩やかであることが、日本メディアのデジタル対応の遅れを招いているのではないか」と感じることもあった。私のソウル滞在と同時期にフェローシップで訪日されていたソウル新聞の明熙眞（ミョン・ヒジン）記者に紹介してもらい、新聞・テレビ各社の「ニューメディア」担当記者が集う勉強会に参加させてもらった時のことだ。韓国では2015年ごろから、新聞・テレビ各社が通常の報道とは別に社会性のある動画コンテンツを制作し、YouTubeなどで配信する新事業を本格化させており、勉強会では各社の担当者がそれぞれの取り組み、課題を報告していた。

学生時代に経験したいじめの被害について、顔を隠さずに当時の状況を語り合う座談会、電車の優先席に座る利用客に妊娠初期の女性が「席を譲ってほしい」と声をかけ、反応をみる実験…。従来のニュースとは一味違う内容の動画を短くまとめ、発表する。新聞社も放送局と同様、コンテンツ作りに意欲的に取り組む姿は、デジタル対応といえれば会見やイベントの様子を撮影した動画を粗い編集で放映するのにとどまる日本の新聞社との大きな違いを感じた。

◆「韓国の苦悩」をヒントに

現地取材の内容を踏まえ、帰国後に連載「キレギと呼ばれてー韓国メディア研究」（オンライン版「韓国メディアの苦悩」）を発表した。韓国メディアからも反応があり、なかには「日本メディアの現状への言及が少なく、韓国報道の問題点ばかりを取り上げれば『嫌韓記事』との批判を免れない」（メディアオヌル）などとする批判の声もあった。

日本メディアも多くの問題を抱え、苦悩しているのは言うまでもない。私が所属する産経新聞でも2020年、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言下での検察幹部との「賭けマージャン」や、下請け業者による世論調査改ざんなど、報道の信頼を損ねる不祥事が続いた。

メディアに対する視線が日に日に厳しくなるなか、良質で信頼されるニュースを届けるにはどうすればいいのか。引き続き韓国メディアの取り組みに注目しヒントをもらいながら、報道のあり方を模索していかなければならない。そう思っている。



生中継を行うニュース専門局YTNのスタジオ

PROFILE

早稲田大学第一文学部卒業後、高麗大学校での語学研修を経てソウル市立大学校国史学科に学士編入。下宿の屋上小屋（オクタッパン）で韓国人学生とのルームシェアを3年続け、学生街の居酒屋と撞球場で韓国語を学ぶ。2007年卒業、産経新聞社入社。千葉、前橋支局を経て、東京・大阪の社会部で主に裁判・検察取材を担当。16年から外信部。平昌冬季五輪や板門店の南北首脳会談、シンガポールの米朝首脳会談などの現地取材を担当した。



ときよし たつや
時吉 達也

「コロナ」に負けるな — 各団体の取り組み —

新型コロナウイルス感染症の影響で、今年度の人物交流助成対象事業の多くは計画の変更を余儀なくされ、オンラインでのプログラムへの変更や、延期して開催を模索するなど、それぞれの団体で試行錯誤が続いています。

「コロナ禍」のなかにあっても、交流の実現に取り組む各団体の様子を、いくつか紹介します。

※内容は2020年12月中旬現在の情報に基づくものです。

第35回日韓学生会議

(第35回日韓学生会議実行委員会)

2020年8月14日-22日

(京都市内で開催予定 ⇒ オンライン上での実施に変更)

韓国の姉妹団体である「韓日学生会議」と共に毎年、テーマを設定し宿泊形式の討論を通じた成果発表などを行っているインターカレッジ・サークルの日韓学生会議。今回は、恒例の14日間の日程を短縮の上、初のオンラインでの開催となりました。

事前の勉強会と当日の分科会活動を通じた知見の共有とネットワークの拡大を目指すスタイルは「コロナ」で劇的な変化を強いられました。「大部分がオンラインツールによる画面越しの活動で不便な点も不安も多いなか、逆に互いが気遣うことで理解が深まった部分も多かった」と語る大会委員長の飯塚友里子さん。最終日の閉会式、全体会の画面に映った参加者たちの別れを惜しむ表情がとても印象的だったそうです。「渡航制限が緩和したら皆で会おう」と約束をし、大会後も交流が続いています。



今回の報告書

福岡インディペンデント映画祭

(福岡インディペンデント映画祭実行委員会)

2020年11月19日-23日(福岡・福岡市科学館にて)

自主制作映画の上映を通じた国内外の映像制作者の発表と交流、育成を目的とした「福岡インディペンデント映画祭」。中でも釜山独立映画協会との交流は10年を超えます。

当初は釜山側の推薦作品の上映と韓国からのゲスト招待を計画するも、9月に入り、出品する韓国の監督たちはビデオコメントでの参加に。「例年は韓国から監督たちが来場し、スタッフと交流を深めるので、そこで作品についての詳細や裏話、今後の展望などをゆっくり伺うことができる。その時間は、作品上映やトークイベントがより豊かになるだけでなく、その後の交流のためにも大切」と語るのは、実行委員会事務局長の橘愛加さん。理想の形が叶わない中でも無事に終えられたのは、10年

間積み上げた信頼関係のおかげだと、橘さんは感じています。「今後もどんな形であっても引き続き交流を続けて行きたい。常にお互いを励まし合う言葉があったのも嬉しかった」とのこと。出演者・観客双方から好評価を受け「毎年、釜山独立映画祭で福岡インディペンデント映画祭の名前を見ていたので、いつかここで上映されるのが夢だった」とのコメントには、これまでの苦勞が報われた気がしたそうです。



映画祭当日の会場の様子(左)と、出品した韓国の監督からのビデオメッセージの様子(右)

KAAT×東京デスロック『外地の三人姉妹』

(一般社団法人unlock)

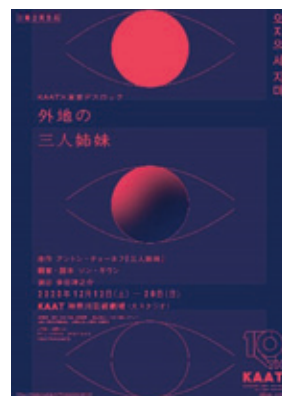
2020年12月12日-20日

(神奈川・KAAT神奈川芸術劇場にて)

アントン・チェーホフ作の『かもめ』を1930年代の日本統治下の朝鮮を舞台に翻案した『가모메 칼메기』(2013年ソウル初演、2014年、2018年日本上演)の、翻案・脚本：ソン・ギウン、演出：多田淳之介のコンビが、『三人姉妹』の舞台を1930年代の朝鮮北部に置き換え、日韓の俳優で上演する計画でした。

脚本家やドラマトルクなどスタッフの来日が叶わず俳優のみの来日となり、入国後の2週間隔離でスケジュールは大幅に遅延、稽古の一部は「Zoom」を介して実施。マスク着用の舞台稽古に稽古場や小道具等の消毒作業、会食自粛や稽古場での雑談禁止はコミュニケーション不足につながり「ソーシャルディスタンス」で客席数を減らし収入も減る、さらには大々的な広報活動もできない等、舞台芸術には逆風ばかりです。

「コロナ禍にもかかわらず来日を決めてくれた韓国人俳優が無事帰国できるよう、公演が無事千秋楽を迎えられるよう、一時も気が抜けませんが、スタッフ、キャストともに一丸となっています」と語る制作担当の服部悦子さん。今回の作品は上演後にオンラインで配信を予定。演劇への関心喚起⇒観客増加に貢献することを期待しているそうです。日韓共同で状況を打破しようとする取り組みは、演劇界が積み重ねてきた信頼関係の表れのように思えます。この信頼関係が、舞台を通じて多くの方々に伝わるのが期待されます。



日韓藝術通信5 温度／온도(オンド) — 往復書簡 — (日韓藝術通信実行委員会)

2020年6月27日-7月10日(日本開催のみ)
⇒ 【韓国・清州展】2020年12月9日-12月13日(清州市・森のギャラリー) 【日本・京都展】2021年1月12日-1月24日(京都市・THE TERMINAL KYOTO)に変更

5回目となる日韓の美術作家による展覧会。作家の招聘は断念し、一方で韓国内での展示を新たに計画、日韓それぞれの会場で展覧会を開催することに。また展覧会までの準備期間には往復書簡(手紙と作品の郵送)で交流を行いました。

日本側の参加作家には大学などの教育機関の関係者が多く、2月末から約3ヶ月続いた一斉休校の影響やオンライン授業への対応等で多忙となり、作品制作の時間確保や展覧会準備の意見調整は困難を極め、また実行委員会の業務もオンライン通話やメッセージアプリが主となり、情報量が多く、行き違いが増えてしまったそうです。

その一方で「展覧会を延期したことが、現状を記録するための新たな交流事業のきっかけになった」と語るのは、代表の奈良田晃治さん。直筆の近況報告と、日常で感じたことや見たことを描き留めた小作品をリレー形式で送り合う取り組みは、展覧会終了も継続する予定とのこと。作品が多くの人の目に触れ、日韓の作家同士の絆が深まることを期待します。



日本側作家から韓国側作家に向けて送られた作品と直筆の手紙



韓国側作家から日本側作家へ送られた書簡に添えられていたドローイング (パク・ジンミョン作)

宗像フェス日韓環境国際交流 (宗像フェスCSR推進実行委員会)

2020年6月中旬-12月中旬(関連行事含む)
⇒ 2021年3月中旬に延期予定
(福岡:宗像市内海岸、釜山:市内海岸、釜山外国語大学にて開催予定)

※この事業は1月中旬にオンラインでの開催が決まりました。

玄界灘でつながる福岡・釜山両都市で環境保全の啓発活動に取り組む、両国学生たちの交流事業。3月中旬への延期で渡航規制緩和に備えつつ、緩和されない場合はオンラインでの「環境会議」や交流事業を行う予定です。

一連の企画の中で参加者が最も楽しみにしているのは、韓国側の来日による交流事業。「コロナ」の第二波・第三波と続き、渡航の可否が不透明な中「日韓の学生が共同で打ち上げ花火をデザインし、日本の会場で打ち上げ、韓国にもオンラインで配信する」というアイデアが浮上。花火制作会社の協力も

得られることになり「意気消沈気味だった学生達が再び前向きになって取り組み、日韓の明日を照らす花火となってくれれば」と語る実行委員長長の浜田修一さん。是非とも実現してほしいものです。



昨年の「釜山・福岡共同海洋プラスチックゴミ収集活動」の様子

「オンライン日韓交流おまつり2020 in SEOUL」参加 (日本総合伝統芸能集団 井坂斗絲幸社中 喜楽座) (舞踊団 正藤)

2020年11月10日(オンラインで参加)

今や最大規模の日韓交流行事となって毎年両国で開催されている「日韓交流おまつり」。「in SEOUL」に出演予定だった「日本総合伝統芸能集団 井坂斗絲幸社中 喜楽座」と「舞踊団 正藤」の2団体は、映像での参加となりました。

「舞踊団 正藤」は日本舞踊や三味線、また殺陣のシーンなどを交えた4つの演目を組み合わせた映像作品を制作。「舞踊は歌や演奏などよりも、ライブで観て頂くことが重要と考えていたので、当初は難しいと考えていましたが、お芝居の経験者も多かったことで、それらを活かし舞踊劇として芝居映像を付け加えることで、映像でも踊りの世界観を伝えやすくなるのではと考えました」とリーダーの正藤竜之助さん。映像出演であることを逆にとり、お芝居の追加や踊り部分にスローモーションなどのエフェクトを付け、ライブ上演では表現できない作品に仕上げました。

「喜楽座」もまた、オンラインでの参加で渡航人数の制約がなくなったことを幸いと考え、和楽器で奏でられる2つのオリジナル曲を、奏者を増やしてより迫力のあるパフォーマンスに仕上げました。「逆境をはねのけ追い風が吹き、道が開けることを願う気持ちを伝えられる内容になった」とメンバーの小山晶(あき)さん。撮影会場手配にメンバーのスケジュール調整、感染防止対策など多くの苦労があったものの、結果として自らの「音楽力」を再認識できる機会となったと感じたそうです。



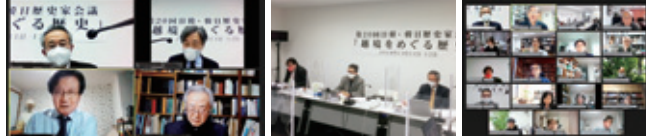
(日本総合伝統芸能集団 井坂斗絲幸社中 喜楽座) 人数を大幅に増やし、迫力ある演奏を披露



(舞踊団 正藤) 芝居のシーンの挿入やスローモーションなどを加えて演出した作品

第20回日韓歴史家会議「越境をめぐる歴史」

2020年12月11日、12日の2日間、会場参加とオンライン参加とのハイブリッド形式で、20回目となる日韓歴史家会議が開催されました。この会議は、2001年に、日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」を設けることを目的として発足したものです。日本史、韓国史のみならず、ヨーロッパ史、経済史等、多様な分野を専門とする両国の歴史研究者が集い、最新の研究成果の報告と、これに基づく意見の交換を行っています。



記念講演会「歴史家の誕生」
講演者の大門正克早稲田大学
教授（写真上段右側）と盧明
鎬ソウル大学校名譽教授（写
真下段右側）

都内の会議施設内
に設けられた日本
側会場の様子

オンライン参加者と
会場参加者を結んで
活発な意見が交わさ
れました

第20回日韓歴史家会議「越境をめぐる歴史」

■会議日程

- ◆12/11(金) 日韓歴史家会議開催記念講演会「歴史家の誕生」
日本側／「日本近現代史研究を反芻・更新する試み—1990年代以降の歴史研究の方法をめぐる—」大門正克（早稲田大特任教授）
韓国側／「高麗史の『述而不作』と『直書』の実状を探し求めた道のり」盧明鎬（ノ・ミョンホ：ソウル大名譽教授）
- ◆12/12(土)
 - ◇第1セッション「越境をめぐる歴史」
司会：小田中直樹（東北大）
報告：日本側／「戦後国際民族移動と東アジアにおける人の移動—その要因連関と語られ方」蘭信三（上智大）
韓国側／「なぜホモミグランス(Homo migrans)なのか」黄惠聖（ファン・ヘソン：漢城大）
討論：韓国側／都珍淳（ト・ジンソン：昌原大）
日本側／山本明代（名古屋大）
 - ◇第2セッション「越境のもたらすもの」
司会：飯島渉（青山学院大）
報告：日本側／「明治初期北海道開拓移住と東北諸藩」檜皮瑞樹（千葉大）
韓国側／「朝鮮と満洲国境迎接地帯における交流・暮らし・統制・協力」尹輝鐸（ユン・フィタク：韓京大）
討論：韓国側／許芝銀（ホ・ジウン：西江大）
日本側／伊地知紀子（大阪大）
 - ◇第3セッション「越境をめぐる記憶とアイデンティティ」
司会：須田努（明治大）
報告：日本側／「国境の街ナルヴァ：エストニアにおけるロシア語系移住民の記憶とアイデンティティの構築」橋本伸也（関西学院大）
韓国側／「雲南白族先住民の系譜選択とアイデンティティ—明、清代における大理地域の墓誌銘の分析を中心に」鄭勉（チョン・ミョン：西江大）
討論：韓国側／林志弦（イム・ジヒョン：西江大）
日本側／武内房司（学習院大）
 - ◇第4セッション「総合討論」
司会：小田中直樹（東北大）、須田努（明治大）

■参加者名簿（日本側）*敬称略、五十音順

蘭 信三	上智大学	国際社会学、歴史社会学、戦争社会学
飯島 渉	青山学院大学	医療社会学
板垣 雄三	東京大学	イスラーム学
伊地知 紀子	大阪市立大学	社会学、文化人類学
上田 信	立教大学	中国史(明清時代)、生態環境史、アジア社会学
大門 正克	早稲田大学	日本近現代社会経済史、日本近現代史
小田中 直樹	東北大学	フランス社会経済史、歴史関連諸科学
木畑 洋一	東京大学/成城大学	国際関係史
左近 幸村	新潟大学	経済史、ロシア史
須田 努	明治大学	日本近世史、近代史
高江洲 昌哉	神奈川大学	日本近現代史、地方制度史、島嶼史
武内 房司	学習院大学	記録史料学
長田 彰文	上智大学	東アジア国際関係史
橋本 伸也	関西学院大学	西洋史、ロシア史、バルト地域研究、教育史
濱下 武志	静岡県立大学	アジア近代史

今回の会議は、伝統的な歴史学が定住者の視点から描かれてきたことに対して、さまざまな背景から地域や国家の枠組みを超えて移動した人々に注目し、従来の歴史認識を再検討しようという意図から「越境をめぐる歴史」をテーマとし、日本側から18名、韓国側から10名の歴史家が参加しました。

「越境をめぐる歴史」、「越境のもたらすもの」、「越境をめぐる記憶とアイデンティティ」と題する3つのセッション別に日韓双方からの報告とこれに対する討論が行われ、活発な議論が交わされました。

初日の12月11日には、会議の開催を記念した講演会「歴史家の誕生」を開催し、早稲田大学特任教授の大門（おおかど）正克氏と、ソウル大学校名譽教授の盧明鎬（ノ・ミョンホ）氏が、歴史研究者を志してから現在に至るまでの道のりや、研究の転機となった出来事などについて語りました。講演会の内容を含む今回の会議の報告書は、3月中に刊行の予定です。

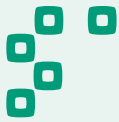
■過去20回の会議テーマ

開催年/回	主 題
2001年 第1回	1945年以後の日韓両国における歴史研究の動向
2002年 第2回	世界史の中の近代化・現代化
2003年 第3回	『ナショナリズム』過去と現在
2004年 第4回	歴史研究における新たな潮流：伝統的知識の役割をめぐる
2005年 第5回	歴史における宗教と信仰
2006年 第6回	歴史家はいま、何をいかに語るべきか
2007年 第7回	反乱か？ 革命か？
2008年 第8回	グローバル・ヒストリーの諸相と展望
2009年 第9回	文化“受容と発展
2010年 第10回	“歴史を裁く”ことの意味
2011年 第11回	社会最下層に対する比較史的考察
2012年 第12回	世界史の中の中国
2013年 第13回	世界史におけるイスラーム
2014年 第14回	世界史認識における“アメリカ”の問題
2015年 第15回	植民主義と脱植民主義：世界史的視野から
2016年 第16回	現代社会と歴史学
2017年 第17回	東アジアの平和思想とその実践—歴史的考察
2018年 第18回	国際関係—その歴史的考察
2019年 第19回	海洋/海域と歴史
2020年 第20回	越境をめぐる歴史

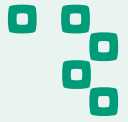
檜皮 瑞樹	千葉大学	日本近世史、日本近代史
宮嶋 博史	成均館大学校	朝鮮史
山本 明代	名古屋大	西洋史、ヨーロッパ史、アメリカ史

参加者名簿（韓国側）*敬称略、カナダラ順

盧 明 鎬	ソウル大学校	韓国史、高麗時代
都 珍 淳	昌原大学校	韓国近現代史
朴 檀	西江大学校	ヨーロッパ現代史
裴 京 漢	釜山大学校	中国近現代政治史、政治思想史、中韓関係史
尹 輝 鐸	韓京大学校	東洋史(中国近代史)
李 泰 鎮	ソウル大学校	韓国近世近代史
林 志 弦	西江大学校	トランスナショナル・ヒストリー、ポランド史
鄭 勉	西江大学校	中国古中世史、雲南史
許 芝 銀	西江大学校	日韓関係史、日本近世史
黄 惠 聖	漢城大学校	米国史(移民・人種史)



交流エッセイ



◎オンライン 第3回日韓大学生OB・OG交流会

JKAF実行委員（東京大学大学院修士2年）

新里 智樹 さん

2020年12月12日(土)、第3回日韓大学生OB・OG交流会をオンライン上にて開催しました。30人以上の方が参加し、国境を越えた交流が行われました。

はじめに、日韓文化交流基金の小野正昭理事長より「今年は春以降に予定されていた基金の訪日・訪韓事業もすべて延期や中止となり、37年間に及ぶ基金の歴史において、日韓両国の学生が直接顔と顔を合わせて交流することができないという、危機的事態となりました。両国間の交流促進を使命とする我々としては、このような状況下においても、腕をこまねいているわけにはいかない、日韓両国の皆さんには何としても交流を継続してほしいと考え、職員一同試行錯誤を繰り返し、オンライン上での日韓交流という活路を見出した年でした」との挨拶がありました。

続いてアイスブレイクタイムでは「究極の2択ゲーム」と題して、「釜山or濟州島」や「北海道or沖縄」などの質問にJKAF・KJAF双方の参加者が答えたり、予想しあったりするゲームを行い、場が温まりました。

団別交流では、本イベントに参加している同じ訪韓団・訪日団同士だった仲間と久しぶりに再会し、思い出話に花を咲かせ、互いの近況などを話し合いました。私が参加した団では、訪韓団での活動が現在にどう活かされているかを話したり、コロナの影響で生活がどのように変わったのかを話し合ったりして盛り上がりました。

テーマ別交流では「就活」「仕事」「文化」「日韓関係」「コロナ」の中から同じテーマに関心を持った人同士で意見交換を行いました。私は「仕事」について話し合いました。韓国側参加者からは「お金を稼いだら何がほしいか」「名古屋の学校に留学するので観光地を教えてください」などの質問がありました。日本側参加者から韓国の仕事事情について質問をする場面も見受けられ、韓国に対する理解をより深める機会になりました。そして、仕事に対する価値観や、みんなが現在どういう仕事をしているのかなどを話し合いました。意見交換するなかで、これから仕事が頑張れるような熱い金言も頂き、非常に価値のある時間を過ごさせていただきました。

最後のアイスブレイクタイムでは、オンラインならではのグループ対抗ゲームを行いました。あるキーワードを、もらったヒントだけで連想して当てるゲームです。例えば「地名が入っているお菓子で、よくお土産として買われている」「有名なキャラクターとコラボしたことがある」「キットカットやクッキーサンドなどとしても売られている」などのヒントから答えの“東京ばな奈”を当てる、というものです。国境を越えて、みんなで一つの問題について考える時間はとても楽しかったです。

その後のフリートークでは、連絡先を交換したり、さまざまなテーマで話し合ったりしました。コロナで依然、直接の交流が難しい状況ではありますが、今回オンラインでこのように楽しく交流を行うことができ本当に良かったです。あっという間の3時間半でした。

イベント後の参加者アンケートでは「アイスブレイクの内容がオンラインだからこそ、日韓だからこそのもので、すごく楽しかったです!また参加したいです!」「オンラインだと地方からでも参加できるのでとてもありがたかったです!!」などの声が聞かれました。

JKAFではみなさんから寄せいただいた意見をもとに、2021年もより良いイベントを作っていくとともに、KJAFを通じ、韓国側のOB・OGとも交流を続けていく所存です。



グループ別交流の様子



交流会に参加したJKAF、KJAFメンバーたち

日韓大学生 オンライン交流事業を開催

「対日理解促進交流プログラム(JENESYS2020)」の一環として、日韓双方で選抜された大学生約60名を対象とした「日韓大学生オンライン交流事業」を、全4回にわたりオンラインで実施いたしました。

「コロナ禍における日韓関係」をテーマに、日韓両国の外務省・外交部による講義や、オンラインでの日韓交流ゆかりの地視察を実施しました。また、全日程を通し、日韓混合の8つのグループでテーマに沿ったプロジェクト活動を行い、活動の成果や相手国へのメッセージを動画やパワーポイント資料にまとめ報告発表したほか、各参加者は、活動及び成果をSNS上でも積極的に発信しました。

●概要 2020年12月19日・26日、2021年1月16日・23日 全4回
主 催：外務省、韓国外交部
実施機関：公益財団法人日韓文化交流基金、韓国国際交流財団

	日程内容
①12/19	○開会式、オリエンテーション ○グループ別交流(自己紹介、グループ名及びプロジェクトテーマ選定)
②12/26	○外務省講義 ○グループ別プロジェクト中間発表、グループ別交流・プロジェクト活動
③1/16	○オンライン新年会 ○韓国外交部講義 ○グループ別交流・プロジェクト活動
④1/23	○テーマ視察①日本：高麗神社<埼玉県日高市> ○テーマ視察②韓国：昌徳宮 樂善齋<ソウル市> ○グループ別プロジェクト成果発表



李垠殿下、李方子妃による記念植樹のエピソードを紹介される高麗文康宮司



李方子妃にゆかりの昌徳宮樂善齋で解説士の説明を聞く韓国側参加者



プロジェクト成果を発表する日韓の大学生たち

THE JAPAN-KOREA
CULTURAL FOUNDATION

事業報告

日韓文化交流基金事業報告

① 青少年交流事業

日韓交流オンライン訪日団

JENESYS事業の一環として実施した訪日団及び訪韓団の参加経験者へのフォローアップを目的に日韓双方の青少年がオンライン上での講義や視察、討論などを通じて交流したプログラム。昨年10月刊行の本誌94号にて紹介。

8月29日、9月5日・12日・19日・26日の全5回
参加者：113名(日本側：34名、韓国側79名)

日韓教員オンライン交流

相互往来による交流が難しい中、日韓両国における教育現場の課題を分かち合い、交流することを目的として、当基金と韓国国立国際教育院の共同で実施したオンラインプログラム。今号4-5ページにて紹介。

9月9日・23日、10月14日・28日の全4回
参加者：延べ67名(日本側：28名、韓国側：39名)

② 学術定期刊行物助成

2020年度助成対象団体より、次の研究成果物が刊行されました。
『韓国朝鮮の文化と社会』第19号(韓国・朝鮮文化研究会編、風響社)
『現代韓国朝鮮研究』第20号(現代韓国朝鮮学会編、中西印刷)

日韓文化交流基金からお知らせ

当基金事務所が入っているビル名が2021年2月1日より、これまでのユニゾ水道橋ビルから、新しく「プライム水道橋ビル」に変更になりました。住所(東京都千代田区神田三崎町2-21-2)は変更ありません。

表紙
作品紹介



高麗家住宅としだれ桜 (作者：下地富雄)

高麗家住宅(こまげじゅうたく)は、高麗神社の境内にあり、高麗神社の神職を務めた高麗家の住居として、17世紀後半に建造された。1976年(昭和51年)6月22日に国指定の重要文化財に指定された。住宅の周りには整備された広場になっており、高麗家住宅の傍らにある樹齢400年と推定されるしだれ桜は3月下旬に見頃を迎え、訪れる人の目を楽しませている。